

てつことだいちゃん、^{きょう}今日は
ふたりでおるすばんです。
ねこのミケもいるから、ふたりでも
ぜんぜんさみしくありません。

「ひこうき、ぶーん！」
だいちゃんは、いつものだいすきな
おもちゃであそんでいます。



あれあれ、でもなんだか
てつこはこまったかお。
「あめがふってきたから、
わたしのおきにいりの
おようふくがぬれちゃう。」
「それに、ミケとあそびたいのに
どこにもいないの・・・」

「ねえ、だいちゃん。いっしょにミケをさがしてくれない？」

ふたりは、おうちのなかでミケをさがすことにしました。

ふたりでミケをさがしていると、ぱあーっと光る本を見つけました。

「こんな^{ほん}本、おうちにあったっけ？」

「ぼくの^{ほん}本じゃないよ?!」



ひか ほん
光る本はとつぜんひらき、もくもくもく・・・と、けむりがでてきました。
けむりのなかから、なんとミケにそっくりなねこがあらわれました。

「あ！ミケだ！！」だいちゃんはうれしそう。

「でもミケなのに、メガネをかけているし、ふくもきているよ。へんなの！」



ふたりがふしぎなかおでながめていると、

なんとそのねこがしゃべりはじめました。

「わたしはミツケ。きみたちを『やってみ隊』のなかまにするためにきたんだ。」

「すごい！しゃべった！カッコいい！」だいちゃんはたのしそう。

「『やってみ隊』ってなあに？」てつこはやっぱりこまったかお。

「ふふ・・・『やってみ隊』っていうのはね、おうちのなかで
おてつだいにチャレンジする子どもたちのことなんだ。」

「それよりも、いまはミケをさがしているんだけど。」

てつこはミケのことがしんぱいです。



ミツケは、えへんとむねをはってこたえました。
「ミケは、きれいなおうちがすきなんだ。
だから、ふたりがおかたづけができるように
なるまで^で出かけてくるとっていたよ。」

だいちゃんはずぐにこういます。

「えー、ぼく、おかたづけきれい！」



てつこはまたこまったかおをしました。

「おかたづけなんて、どうしたらいいかわからないもん。

いつもママがやってくれるし…わたしたちにはできないよ…。」

「でも…ミケがかえってこないのは、さみしい。」

すると、ミツケはさっきの本^{ほん}をゆびさしていいました。

「じゃあ、まずはいっしょにこの本^{ほん}をよんでみよう。

ふたりにもできることがあるかもしれないよ。」